東京都江戸東京博物館紀要　第14号　2024年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 14, pp. 1－23, March, 2024

アルノルドゥス・モンタヌス著
『東インド会社遣日使節紀行』における言葉とイメージ
― 館蔵オランダ語版を手がかりとして

瀧　　良　介*

目　次

はじめに
１　書誌的事項
２　構成と内容
３　叙述の方法
４　制作の裏側
おわりに

キーワード　オランダ東インド会社　日本誌　旅行記　異国趣味　モンタヌス　銅版画

はじめに

世界とその住人についての知識とは、あらゆる学知の中でも最も麗しく、最も悦ばしいものです。それは、世界中の様々な民族の気質、風俗、慣習、そして宗教について教えることで、精神を愉しませ、好奇心を満たし、教養を深めてくれます。またそれは、社交的な集まりに適した唯一の知識であり、衒学趣味の誹りを受ける心配なく、どんな会話の中でも気兼ねなく話題とすることができます。この美しい学知の探求に好奇心を掻き立てられた多くの人々が、現地に住む人々の風俗や慣習をその目で見て観察するため、はるか遠くの国々へと旅立って行きました。そして、彼らは親切にもその記録を公にしてくれたのです。我が家を離れることなく、時間もかけずに、はるか彼方の民族について知ることのできるこの気軽な手段を彼らから受け取らないとすれば、私たちはまったく好奇心に乏しい人間ということになるでしょう[1)]。

『東インド会社遣日使節紀行』縮刷版（1686）序文〈筆者訳〉

17世紀のヨーロッパでは、出版業の隆盛に後押しされ、日本に関する情報が少しずつ一般の読者にも届きはじめた。情報の発信源となったのは、当時唯一ヨーロッパ国として交易を許されていたオランダ

*東京都江戸東京博物館学芸員

である。なかでも、アムステルダムの出版者ヤコブ・ファン・メウルス（1619/20 ～ 79）による1669年の『東インド会社遣日使節紀行』の出版は、一つの画期をなす[2)]。本書は、17世紀半ばに行われた複数のオランダ東インド会社関係者の江戸参府の記録に取材した旅行記であるとともに、日本の歴史、風土、生活、信仰など幅広い話題についての情報を集約した、総合的な「日本誌」としての側面を持つ[3)]。それは、宣教や通商といった特定の戦略的主題に沿った報告書集とは異質の、広く国境を超えた人びとの「好奇心」に応えるべく企画された書物であった。原著はオランダ語で書かれたが、同1669年にドイツ語版、翌1670年に英語版が印刷・出版され、1680年にはフランス語版も上梓されている。また、メウルスの没後、別の版元から1686年の縮刷版をはじめとする普及版も何点か出版されている[4)]。

本書の執筆を担った博学のオランダ人著述家アルノルドゥス・モンタヌス（モンターヌス、1625 ～ 83）は、日本を訪れた経験はおろか、オランダを出たことすらなかったとされる[5)]。それでいて、まるで現地に居合わせたかのように語る彼の文体は、本書に独特の生彩を与えている。また、なにより本書が画期的だったのは、100点弱にもおよぶ銅版画による挿絵が付された点であった。近世以前の西欧で出版された日本を主題とする書物に、これほど多くの版画が付された例はない。もっとも、版画の制作者もまた直接その目で日本を見たわけではなく、その内容は想像や誇張を多く含んでいる。だがそれでも本書は、同じくファン・メウルスが出版した、ヨハン・ニューホフの『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』とともに、ヨーロッパにおける異国案内記の「絵画的転回」（pictorial turn）の契機となった[6)]。

本書は、東京帝国大学の和田萬吉による1925年（大正14）の英語版からの抄訳と解題をもって、はじめて本格的に日本に紹介された[7)]。同訳書は、島田孝右氏によるさらなる解題とともに、復刻版も出版されている[8)]。他方、1974年（昭和49）には、永積洋子氏による貴重なオランダ語原文からの抄訳も上梓されている[9)]。その後、レイニアー・ヘスリンク氏が著者モンタヌスの人物像を明らかにし、さらに近年では、フレデリック・クレインス氏が、欧米における研究の蓄積も踏まえつつ、内容にも踏み込んだ包括的な紹介を行っている[10)]。しかしながら、膨大かつ多様なエピソードと図版からなる本書の全貌を明らかにするには、今後さらに議論が重ねられる必要がある。本稿では、江戸東京博物館所蔵のオランダ語版【口絵１】【図１】をもとに、特に美術史学・図像学の視点を取り入れながら、いま一度その分析を試みることとしたい。

1　書誌的事項

まずは、本資料の書誌的事項に関わる留意点について述べておきたい。『東インド会社遣日使節紀行』（以下『日本誌』と表記）のオランダ語版には、少なくとも二つの版が確認でき、江戸東京博物館所蔵版（以下「江戸博所蔵版」）とは別に、国際日本文化研究センターや九州大学などの所蔵する版（以下「日文研・九大所蔵版」）が存在している【図２】[11)]。両者には口絵のデザインに明確な違いがみられ、たとえば江戸博所蔵版では、画面中央の日本人と西洋人女性の立つ祭壇の背後に、豪華な装飾を施した背障（リアドス）が描かれているのが分かる。また、題字や本文の綴りの規則に一貫した異同が存在し、後述するように挿絵

【図１】『東インド会社遣日使節紀行』（館蔵オランダ語版）口絵
17世紀　16200163

【図２】『東インド会社遣日使節紀行』（オランダ語版）口絵
1669年　九州大学図書館蔵

【図３】『東インド会社遣日使節紀行』（フランス語版）口絵 1680年
フランス国立図書館蔵

にも細かな変更がいくつも見られることから、両者は完全な別版であることが了解される。しかし、ここで問題となるのは、いずれの版の口絵・表題紙にも、1669年の年記とファン・メウルスの名が表示されている点である。実際には、どちらが初版本にあたるのか。そもそも、現代とは比較にならないほど製版と印刷に手間とコストがかかった当時、同じ年に同じメウルスが同じアムステルダムで同じオランダ語の別版を印刷するということがあり得るのか。あるいは、なぜ日文研・九大所蔵版にはオランダ共和国から授与された独占出版権（privilege）の表記が存在するのに対し、江戸博所蔵版にはそれが見られないのか。両者を混同したまま紹介がなされるケースも少なくないため、まずはこの点を明確にしておきたい。

端的に言えば、初版本にあたるのは日文研・九大所蔵版の方であり、江戸博所蔵版は再版本であると考えられる。そして、この再版本は、実際には1680年以降に印刷された可能性が高い。このことは、すでにファン・エーヘン氏が、印刷を繰り返し摩耗した銅版が再刻ないし交換されることにより生じる、挿絵の細部の変化に注目しながら詳しく論じている[12)]。『日本誌』の版画は、1669年のオランダ語版初版、同じく1669年のドイツ語版、そして1670年の英語版まで、基本的にすべて同じ銅板から刷られているが、1680年のフランス語版【図３】の出版を機に、大部分の銅版が再刻・新調される（そのうち一部は、既存の挿絵を写すように彫版されたため、印画が反転する）[13)]。重要なのは、問題の再版オランダ語本の挿絵の大部分が、このフランス語版と同じ銅版から刷られており、かつ何点かの挿絵にいたっては、フランス語版で依然初版のままであったものをさらに刷新している点である[14)]。

今回調査を行うなかで、江戸博所蔵本もまた、この再版本に該当することが確認された。たとえば、「日本の楽師たち」として紹介されている図を見てみたい【図４～６】。江戸博所蔵版の図は、ちょうどフランス語版と同じように、初版本の鏡像となっていることが分かる。さらに、中央の「楽師」の顔に着目すれば、フランス語版と同様の細部の変更がみてとれる【図７～９】。

さらにここでは、重要な変化であるにもかかわらず素通りされるのが常である、口絵の図像学的細部の相違について述べておきたい。日文研・九大所蔵版の口絵では、中央壇上の西洋人女性のドレスに交差する二つの錨を象った紋章が、また彼女の傍らに立てかけてある旗の上に、アルファベット３文字を組み合わせたモノグラムがそれぞれ表されている【図10】。前者はオランダ（ネーデルラント連邦共和国）海軍の紋章であり、後者はGOC、すなわちオランダ東インド会社の正式名称である「連合ネーデルラント特許東インド会社」（Verenigde Nederlandsche Geoctrooieerde Oostindische Compagnie）の末尾３単語のイニシアルを組み合わせたものと考えられる[15)]。これらのモティーフは、同じ銅版を用いて印刷されたドイツ語版と英語版の口絵にも確認できる。

これに対して、江戸博所蔵版の口絵では、旗からGOCのモノグラムが消え、さらには女性のドレスのオランダ海軍の紋章が、フルール・ド・リスと呼ばれるフランス王家と縁の深い紋章のパターンに置き換えられている【図11】[16)]。この紋章は、1680年のフランス語版において、口絵はもちろん、冒頭に挿入されたルイ14世への献辞の欄外装飾にも用いられており、やはりフランス語版の出版と切り離して考えることはできない【図12】。こうしたパラテクストの追加・変更は、1672年の仏蘭戦争の勃発以来、政治的・軍事的には緊張関係にあったフランスで本書を売るために施された措置であったと考えられる[17)]。先に述べたカーテン付きの背障（リアドス）の追加も、背景の軍艦の存在感の縮小とセットで行われたのかもしれない。

ほかにも本図には、画面左側の日本人の着物の紋様など、様々な細部の追加がいくつも指摘できる。こうした諸々の変更を伴った新しい口絵からして、江戸博所蔵版が額面どおりの1669年にすでに完成していたかどうかは疑わしい。中央の祭壇下部にみられるタイトルのレタリングに関しても、日文研・九大所蔵版と同じ時期に用意されたものとは考えにくく、後年のフランス語版に倣ったものとみえる【図13～15】。

西洋古典籍において、旧版の書誌情報を温存したまま改訂版を出版するケースは珍しくない。ファン・メウルスは、フランス語版の出版を目前に控えた1679年末に息を引き取っているため、このオランダ語再版本は、メウルスから商業上の諸権利を相続した寡婦のアンナ・ゴーレットか、彼女と提携した書籍商によって印刷されたものと推測される[18)]。いずれにせよ、出版者は、新版を上梓するにあたって、すでに規範（カノン）となっていた故人の名と1669年の年記を温存する方が得策と考えたのであろう。江戸博所蔵版に印刷独占権の表記が存在しない事実についても、新版の出版時にその有効期限である15年が経過していたと考えれば、辻褄も合うことになる[19)]。

【図４】「楽師たち」
オランダ語初版　挿絵

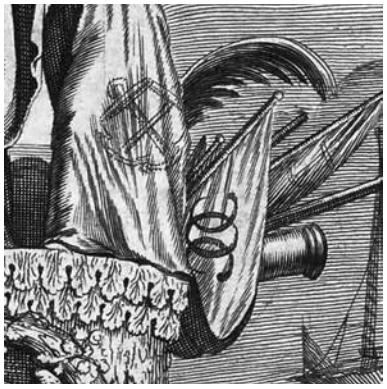
【図５】「楽師たち」
館蔵オランダ語版　挿絵

【図６】「楽師たち」
フランス語版　挿絵

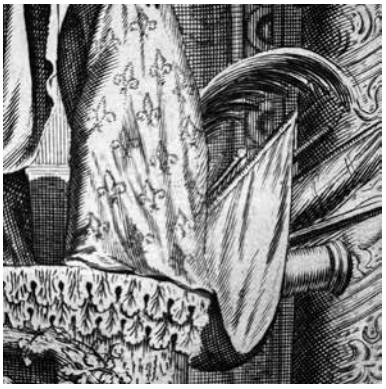
【図７】図４部分

【図８】図５部分

【図９】図６部分



【図10】オランダ語初版
口絵（図２）　部分

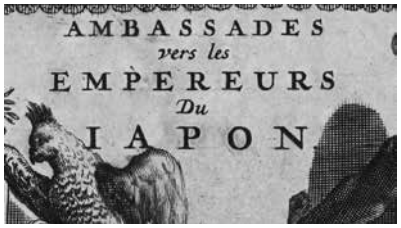


【図11】館蔵オランダ語版
口絵（図１）　部分

【図12】フランス語版　欄外装飾

【図13】オランダ語初版
口絵（図２）　部分

【図14】館蔵オランダ語版
口絵（図１）　部分



【図15】フランス語版
口絵（図３）　部分

２　構成と内容

資料の身元を明らかにしたところで、次に本書の構成と内容を概観する。本書は、分類や体系化とは異なる論理で構成されており、第一部と第二部に分かれるほかは、章節も設けず、「漫々書き流し」の形式をとる[20]。さらには、随所で延々と脱線を繰り返すため、そもそも要約という営みに馴染まない書物である。しかし、先行研究に依拠して要点を拾えば、次のようなものとなる[21]。

第一部は、世界の成り立ちの記述に始まり、日本の発見やオランダ商館設立の経緯などを略記した後、1649年から50年にかけて行われた特使アンドレアス・フリシウスと商館長アントニオ・ファン・ブルックホルストの江戸参府の叙述を中心に展開する。そしてその間、あちこちで立ち止まっては、フランソワ・カロンなど過去の東インド会社関係者による報告や、ルイス・フロイスなどイエズス会宣教師の記述を借用しながら、日本の歴史や風俗、信仰に関する情報が追加される。また以上にくわえて、アリストテレスやプリニウス、さらには同時代の宗教学者・科学者であるアタナシウス・キルヒャーなどを参照しながら、古代ギリシア・ローマ、エジプト、インド、中国などとの比較文明論や、自然哲学的考察が行われる。

第二部では、まず前半部において、いわゆる「ブレスケンス号事件」、すなわち1643年に南部藩山田浦に入港したコルネリス・スハープ船長と下級商務員バイルフェルトの一行が捕縛され、江戸に護送され取調べを受けた後、長崎のオランダ商館に引き渡されるまでの顛末が記される[22]。後半では、より最近の江戸参府に話題がおよび、明暦の大火をその目で目撃した商館長ザハリアス・ワーヘナールの江戸参府（1657年および1659年）、同じく商館長を勤めたヘンドリック・インダイクの江戸参府（1660 ～ 61年）、さらには身元一切不明のファン・ゼルデレンなる人物の江戸参府などが取り上げられる。また、第一部より頻度は下がるが、これらの旅行の叙述の合間にも、外部の書物から得た様々なエピソードや情報が適宜挿入される。

本書が二部構成となっているのは、ヘスリンク氏が推測しているように、現行の第一部が完成した後、メウルスもしくはモンタヌスが新たに日誌の写本を入手する機会に恵まれ、急ぎそれに基づき「第二部」を追加したためと考えられる[23]。ここでは、1680年のフランス語版に加筆された文章の中に、この追加の事実への言及が見出せる点を指摘しておきたい。その記すところによれば、「完璧なもの以外は何一つ世に出したくないという熱意」に駆られた筆者は、現行の第一部の完成後、本当に日本という題材を汲み尽くしたかどうかを確かめるべく、あらゆる資料を渉猟した。その結果、ほかにもきわめて興味深い資料を大量に発見し、第二部の追加なくして本書の完成はないと信じるに至ったのだという[24]。

さて、以上のテクストの間には、銅版画による図版が随時挿入される。諸版によりその数はわずかに前後するが、オランダ語版では、初版・再版とも総数96点を数える[25)]。これらは、テクストとともに組版された71点の小図版と、折込みの大図版25点の２種に分かれる。その内容は、参府の経路図とされる地図を別とすれば、特定の事件を表したもの、都市や自然の景色を表したもの、様々な身分の日本人の風俗を表したもの、寺社にまつられた仏像・神像を表したものに大別できる。

巻末には、「製本師のための手引き」（Aanwyzing voor de Boek-Binders）として、頁番号のない大図版の折込み位置が指示されている。これは、当時の書籍が未製本のまま束ないしはばらで売られることが普通であったことによる。版画の内容を概観するため、この手引きから大図版の題名を抜き出すと、次のようになる。

１．旅程図（Reis-kaart）
２．バタヴィア（Stad Batavia）
３．長崎の商館（Logie voor Nangesaque）
４．大坂（Osacca）
５．皇帝公方の殺害
（Moord van den Kaisar Cubo）
６．都（De stad Miaco）
７．江戸（Jedo）
８．千の偶像のある寺［三十三間堂］
（Tempel met duizend beelden）
９．江戸の皇帝の宮廷（Kaisars hof tot Jedo）
10. 都の内裏の宮廷（Hof des Dairoos tot Miaco）
11. 地獄の沸湯［雲仙地獄］
（Ziedende water van Singok）
12. 大仏寺［方広寺］（Tempel van Dayboth）
13. 大坂城（Kasteel van Osacca）
14. 堺郊外の寺（Tempel buiten Saccay）
15. 江戸の地震（Aerdbeeving tot Jedo）
16. 皇帝の玉座（Des Kaisers Throon）
17. 墓地（Begraaf-plaatzen）
18. 結婚式（Ceremonie van haar trouwen）
19. 江戸の火事（Brand van Jedo）
20. 堺（De stad Saccay）
21. シウルプラマ火山
（Brandende berg Sjurpurama）
22. 鹿児島（Stad Cangoxuma）
23. 都の奉行の出迎え
（Het uitryden van de Gouverneur van Miaco）
24. 喜びの山 パウロママ
（Vreugden-berg Pauromama）
25. 宮でのオランダ使節の歓待
（Inhaaling van de Hollandtsche gesant tot Mia）

大図版は小図版に比べ概して質が高く、当初から一枚ものの版画としての流通も想定されていたと思われる。なかには後から彩色を施したものもあり、当館にも英語版の出版に際して刷られたと推測される作例がいくつか伝わる【図16】（本号表紙にカラー版掲載）。大図版の大半と小図版の一部は、画中の重要な要素に数字を振って補註を付している。原著ではオランダ語表記のみであったが、すぐに多言語化が図られ、上の手彩色の版画にも英語の註が追加されている。なお、こ

【図16】「皇帝の玉座」（将軍謁見図）
『日本誌』挿絵　英語版
1670年　館蔵91210471

れとは別に“Cum privil. S.C. Mtis.”の文字が見られることがある。これは神聖ローマ皇帝による公認と印刷独占権の付与の証（Cum Privilegio Sacrae Caesareae Majestatis）であり、もともとはドイツでの販売を念頭に置いて取得されたものとみえる[26)]。

３　叙述の方法

ここからは、本書の内容をより具体的に検討したい。冒頭でも述べたとおり、モンタヌスのテクストは、あたかも使節団に同行したかのような語りを根本的な特色とする。クレインス氏が強調しているように、そこでは視覚的な描写が一つの鍵となっている[27)]。すなわち、モンタヌスは、使節団がたどる〈道〉に寄り添いつつ、そこで見たままのものとして、周囲の風景、人、物を徹底的に描写してゆくのである。もっとも、目撃譚としての語りは、洋の東西を問わず旅行記の伝統的な手法ではある[28)]。彼のテクストに関して注目すべき点の一つは、日誌の記録に基づいて仮構された旅の情景の中に、外部からの情報を巧みに組み込み同化させてしまう手続きにあると言える。

以下ではまず、モンタヌスのテクストと彼の利用した日誌の記述とを比較しながら、この点について見ていく。次に引用するのは、第二部前半のブレスケンス号事件の叙述の基礎資料となった、下級商館員バイルフェルトの日誌の1643年11月８日（寛永20年９月27日）付の記事である。この日、江戸に拘留中だった同船の船長スハープとバイルフェルトの両名は、幕府の下級役人に呼び出され、嵐で行き別れた友船カストリクム号と接触したらしい漁民からの押収品を前に様々な質問を受ける。

1643年11月８日

午後、我々二人即ち船長と下級商務員は、我々の宿主の寝室にいる通詞吉兵衛、八左衛門に呼ばれた。そこに行くと、日本の貴族、即ち下級ボンジョイ（役人）が、日本文字の一杯書いてある大きな紙と、四角い白木の箱を持っていた。我々は、この箱に次の物が入っているのを見た。即ち、

オランダの土製かめ　一個
大酒杯　一個
端に赤い縞のあるコロマンデル海岸産の布の一片
コロマンデル海岸産の帆布
うわぐすりをかけた、中国の壺一個
掌ぐらいの大きさの白ダマスク織　一片
黄色のチャウル　一片
赤と黄の珊瑚　一連（パリの細工）

ここに呼ばれていた通詞藤左衛門、孫兵衛殿により、次にあげる質問が出された。[...] [29)]

日誌はこの後、役人とスハープらの間で行われた、カストリクム号ならびにブレスケンス号についての質疑応答の内容の記述に移行する。上の引用は、それ自体が描写的であるが、モンタヌスはこれを機

と捉え、さらに次のように、役人の容貌や珍奇な風習の情報をまことしやかに加筆している。

この様な報告を受けて、少なからず当惑していると、スハープとベイルフェルトは宿主に立派な部屋に呼ばれた。そこには通詞の吉兵衛と八左衛門のほか、一人の日本人貴族がいて、日本の文字のいっぱい書いてある大きな紙と、漆塗りの四角い箱を持っていた。

貴族は、誇り高い威厳をもって、毛皮で裏打ちされた刺繍のある上着に身を包み、高価な絨毯の上に無帽で座っていた。髪は前と後耳の横で結んであった。上着は胸の前で開いており、心臓のあたりでぼたんでとめ、ここには金の留め金がついていた。上着の間からは、花模様の下着が出ていた。巾広のズボンは、膝より遥か下までのびていた。左手には扇を持ち、この上には、鍍金したばらの飾りがあった。両脇には下僕がいて、絨緞の縁飾りが四角い椅子に均等にかかる様に直した。貴族は一般に家の中ではこの様にして絨緞に座って運ばれ、外に出る時には駕輿を用いる。

貴族はようやく漆塗りの箱を開き、ここからオランダ製の水がめ、大酒杯、赤い縞のある小布、うわぐすりをかけた中国の壺、帆布、テルテナの煙草、白ダマスク織の一片、パリ製の赤と黄の珊瑚一連をとり出した。[…] [30]

〈筆者訳・下線筆者〉

このようにモンタヌスのテクストでは、使節が実際に目撃したものと、偽の目撃体験とがほとんど渾然一体となり、一つの情景を構成する。原典とされた日誌の内容が明らかでない場合や、追加挿入された情報自体に明らかな誤りが見られない場合、両者を完全に分離することは今日の人間でも困難となる。また、こうした詳細な描写の傍には、多くの場合図版が配置されており、「あるがまま」の景色を追体験するよう読者を誘う【図17】。

【図17】「貴族と従者」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

モンタヌスの創出する情景は、さらに別の話題を導入するための呼び水としても機能する。上のバイルフェルトの日記は、一連の問答の内容を列挙し終えると、「これらすべての問答を、さきのボンジョイが書き留めた後、彼は帰った」とのみ記し、尋問に関する記述を閉じている[31]。これに対し、モンタヌスは、この書き留めるという行為に焦点を当て、次のような記述へと膨らませる。

これらの出された質問をすべて、貴族は日本語の書いてある文書から読上げた。彼は同時に、それぞれの質問の間に（このため紙には何も書かない余白があけてあった）、オランダ人の回答を、おどろくべき速さで書き記した。藤左衛門が訳すや否や、それは書き留められた。なぜならば、一つの文字が一つの完全な言葉を意味するからである。そこで、言葉の数と文字の数は同じだけある。即ちアタナシウス・キルヘルスによれば八万という。それぞれの文字がそれ自体で完全な意味を持

つところから、シナ人と日本人は上から下へ文字を書くのである。[...]［以下さらに世界の文字との比較が続く］[32)]

ここでモンタヌスは、役人の筆記という行為を劇的に描写したうえで、その「おどろくべき速さ」を可能にした漢字という表意文字の経済性へと話を繋げ、そこからさらにキルヒャーに基づく文字の比較文化論へと巧みに話題を展開させている[33)]。このように文脈に配慮しつつ入念に準備した「脱線」によって日本に関する論点を一点一点拾っていくのも、本書のテクストの特色の一つである。モンタヌスは、この尋問に先立つ井上筑後守政重による尋問の場面においても、日記には特段言及のない書記の存在に突如焦点を当て、日本人の筆記用具や筆法について詳細な説明を加えている[34)]。

モンタヌスのテクストに関し、より文体的な観点から今ひとつ注目すべきは、出来事の細かな継起を表現することに心を砕いている点である。すなわち、彼は「…するやいなや」といったような表現をことあるごとに用いて、絶えず場面に臨場感と躍動感を与えようとするのである。たとえば、次に引用するのは、ファン・ゼルデレンの江戸参府の物語より、彼が桑名（Quana）からいわゆる「七里の渡し」を渡って宮宿（Mia）に到着したところ、現地の行政官たるObirham Gianton殿なる人物に出迎えられる場面である。この場面は、特に重要な場面と見做されていたらしく、折込みの大図版が付されている【図18】。

【図18】「宮でのオランダ使節の歓待」
『日本誌』挿絵　館蔵オランダ語版より

ゼルデレンが皇帝への贈り物を船から浜へと急いで荷下ろししていると、彼を出迎えるために、すぐに宮の行政官（Stadthouder）を乗せた車が従者たちを伴って市街の門から出てきた。門のすぐ外には銅盤を吊るした装置がいくつかあり、何人かの日本人がそれでやかましく音を立てた。大勢の衛兵とともに、なおも様々な乗物（norimon）が浜辺の方へと向かってきた。隆起した岩のふもとに4人のオランダ人たちが立ち、賑やかにトランペットを吹いた。Obirham Gianton殿という名の宮の行政官が、ゼルデレンを見るやいなや、乗物から降りた。使節のもとに駆け寄った。そして日本の作法にしたがい、地面に向かって体を折り曲げた。彼の背後にはたくさんの護衛が立っており、ある者はマスケット銃を、ある者は長槍を、またある者は薙刀（nangenetten）を携えていた[35)]。

〈筆者訳〉

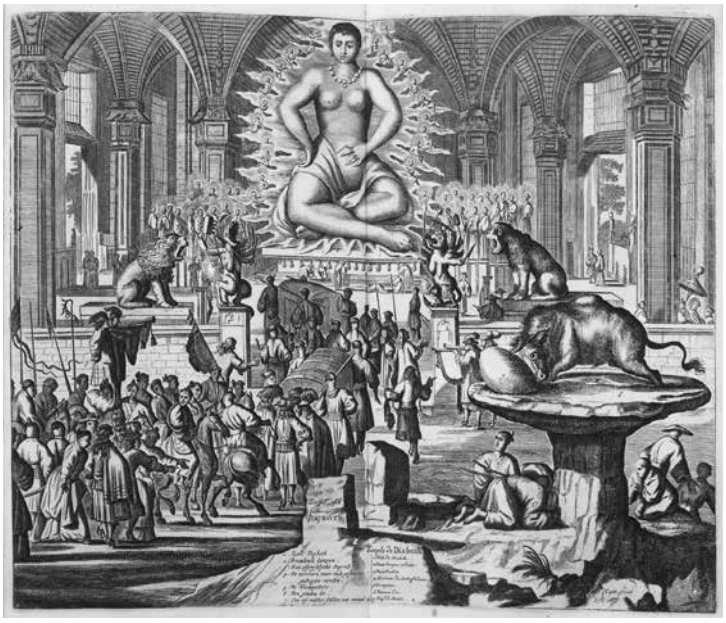
まるでコマ送りをするかのように描写される行政官の行為など、引用文はほとんど映像的とすらいえる動的な効果に満ちている。画像は、具体的な細部を提示することでモンタヌスのテクストを補うが、

他方でモンタヌスのテクストは、原理的に単一の瞬間しか切り取ることのできない画像の限界を補う。『日本誌』は、このようにテクストとイメージを相補的に作用させることで、抽象化された概念や図式とは別の、空間的かつ体験的な知識の提示を実現しているのである。

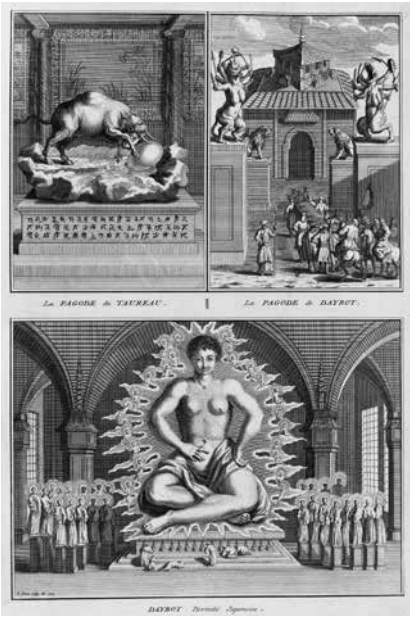
ところで、こうした「空間」「体験」への志向は、本書の図版のコンポジションのあり方自体にも自ずと影響を与えている。それはたとえば、本書の中でも有名な、京都の大仏殿（方広寺）周辺を表した図と、18世紀に出版された初の本格的な比較宗教学の書である『世界の諸民族の宗教的儀礼と慣習』(1723～43）におけるその転用を比較すれば明らかである【図19・20】[36)]。

『日本誌』の図版には、様々なディテールが詰め込まれ、熱気のようなものさえ感じられる画面を構成している。左前景から、オランダ使節とその案内役の行列が次々と奥へ繰り込んでいく。行列の中には、フリシウスとブルックホルストを乗せた二つの乗物が描かれる。行列の向かう先、それぞれ対になった異形の像と獅子像が守護する寺院の門の向こうには、ヨーロッパ風のヴォールト天井を持つ仏殿がひかえており、その中心に女性として表された大仏像が鎮座している。さらに、前景に目を戻せば、右側に猛り狂う雄牛の像を拝む集団が見られる。これらはいずれもモンタヌスが文中で言及している要素であり、画家はそれらすべてを一つの空間的広がりの中で提示するために、個々の事物の配置を巧みに操作している[37)]。

これに対し、『世界の諸民族の宗教的儀礼と慣習』の図版を手がけた18世紀の版画家ベルナール・ピカールは、原図の要素を分割・抽出し、それぞれを別個に区切られた枠の中で再提示することを選んだ。その結果、各図版は各々の偶像の純粋な図解としてはより相応しいものとなっているが、原図が有していた空間のダイナミズムは失われている。こうした操作もまた、百科全書に先立つ初期の啓蒙主義的著作とも言われる本書の分類的・客観的思考を反映していると言えよう。



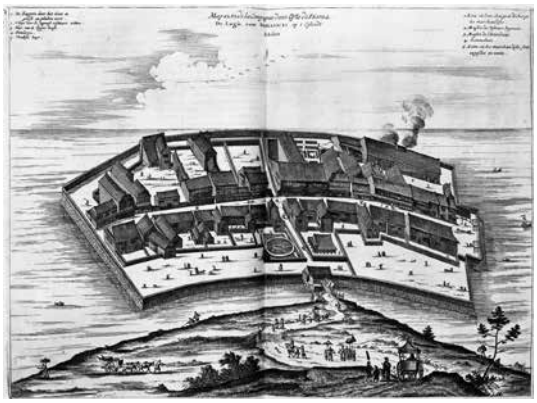
【図19】「大仏殿」（方広寺）『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より



【図20】『世界の諸民族の宗教的儀礼と慣習』
挿絵 18世紀　フランス国立図書館蔵

４　制作の裏側

以上ここまで、テクストの分析を軸に本書の特色を吟味してきた。続いては、本書の図版の制作過程や、それが本書全体のあり方に及ぼす影響について論じることとしたい。



【図21】「長崎の商館」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

先行研究では、本書の図版の制作過程に関して、主に二つの系統が議論されている[38)]。一つは、モンタヌスのテクストを画家が想像力で補いながら視覚的に解釈・翻訳したとされるもので、前節で見た方広寺の大仏殿の版画などもこれにあたると考えられている[39)]。このケースでは、一字一句テクストに対応する事物が丁寧に描かれたとしても、奇異な様相を示すことが少なくない。そしてもう一つは、オランダ商館員が制作したスケッチなど、現地での観察に基づく視覚的記録を参照したとされるものである。これはたとえば、出島の商館の様子を伝える最古の記録とされるオランダ商館図【図21】や、大坂城の鳥観図など、本書の中でも例外的に真正性が認められている作品がまず挙げられる[40)]。あるいは、江戸や京都のパノラマ図のように、西洋人の趣味に合わせたデフォルメや変更を含みながらも、なんらかの実見に基づくと主張されるものがある[41)]。第二部で取り上げられる商館長ワーヘナールは旅行先の各地でスケッチを行っていたことが知られ、メウルスないしモンタヌスが彼の日誌を入手した際、一緒に素描も手に入れていた可能性が推定されている[42)]。

以上の二系統はいずれも、まず旅行者が目撃した生の事実があり、それが言葉もしくは絵を媒介として正確または不正確に伝わった結果として、本書の挿絵があると想定している。しかしながら、本書の中には、そのような一方通行の流れでは捉えきれない画文の関係も一部存在している。すなわち、はじめに図像ありきで、それを参照しながら描写が行われ、偽の目撃体験が創出されるというケースである。

以下まずはこの点について、本書の中でもひときわ異彩を放っている、いくつかの偶像のイメージを取り上げたい。それらはいずれも第一部のフリシウスとブルックホルストの旅路に登場し、非常に詳細な外形の描写を伴っている。たとえば次は、大坂の奉行所の近くにあった「悪魔の殿堂」（tempel der duivelen）の中で崇められていたという、猪のような頭部と四つの腕を持つ像についての記述である【図22】。

> そこで日本人は恐ろしい一体の像に祈りを捧げている。その像は宝石を散りばめた黄金の冠を頭に被っている。頭部自体は猪の頭に似ており、牙が突き出ている。胸の上には、二手に分かれたヴェールがかかっている。この像をいっそう恐ろしくするのは、四本の腕と手である。左手の一つは上に挙げられ、一番長い指先の周囲に輪が表されている。もう一方［の左手］は下に垂れて、開いた百合の花に似た花を持っている。上側の右手は、火炎を吐く小さな竜（蛇）の頭部をつかんでいる。

【図22】「猪の頭部を持つ像」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

【図23】「観音像」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

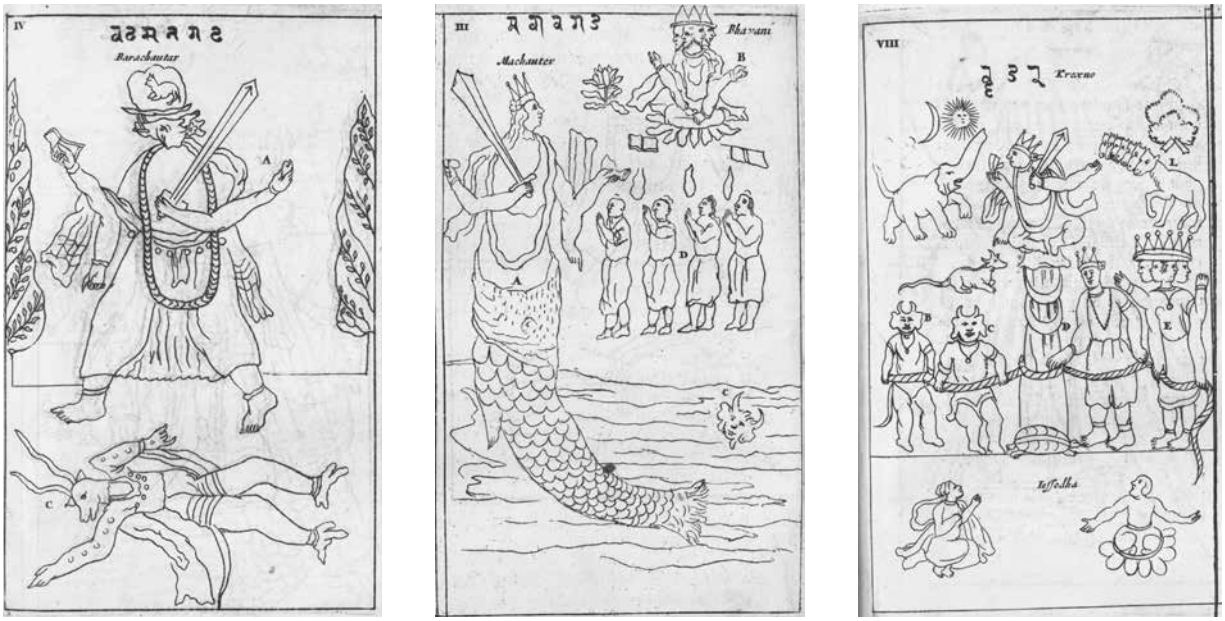
下の方［の右手］は、金製の笏丈を握っている。像の足下には悪魔が横たわっており、胸と太腿を踏みつけられている。この悪魔は、長い雄牛の角の生えた、気味の悪い毛むくじゃらの頭部をしている。［…］[43]

〈筆者訳〉

一部先行研究は、フリシウスたちが実際にどのような神仏の像を見たのかを考察している。たとえばクレインス氏は、上記引用の内容を、明王像についての説明であると推測している[44]。降三世明王ないしは軍荼利明王などは、いずれも鋭い牙を有し、多臂であり、持物にもある程度の共通性がある。氏は、フリシウスらの同行者とされる日誌の作成者が、明王像の忿怒の姿を悪魔として認識したものと推測している。

しかし他方、この「悪魔の殿堂」のすぐ後に紹介される、同じ大坂の別の寺院の中に安置されていたという「観音像」【図23】については、実際の観音像との関連付けは困難である[45]。クレインス氏はこれを魚籃観音に結びつけているが、魚籃観音の像容は、手に魚の入ったかごを持つか、大魚の背に乗る姿で表されるのが通例である[46]。「巨大な魚の大口から上半身をのぞかせる」とされるこの「観音像」の外観は、モンタヌスの記述からして、現地における目撃証言に依拠したものとは考えにくい。

では、こうした神仏の姿はどこに由来するのか。すでに別のいくつかの研究は、上の二つの偶像がヒンドゥー教の神であるヴィシュヌ神の十大化身（ダシャーヴァターラ）の図像との強い関連を示していることを指摘している[47]。化身（アヴァターラ）とは、ヴィシュヌ神が様々な姿をとって現世に現れたものを指す。猪の頭を持つのは、悪魔によって沈められた大地を救い上げた第三の化身ヴァラーハ（猪）で、半身が魚の像は、大洪水を予言して人類を救った第一の化身マツヤ（魚）にあたる[48]。ヴィシュヌの化身の図像は、本稿でも先に何度かその名に言及している、アタナシウス・キルヒャーの『中国図説』が、すでにインドの神々の姿として紹介していた【図24～26】[49]。同書は、アムステルダムのヤンソニウス・ファン・ワースベルへらが1667年に刊行したものであるが、ファン・メウルスもまた並々ならぬ関心を示しており、同年に自ら海賊版を出版してさえいる（結果彼は、ヤンソニウスに訴訟を起こされている）[50]。



【図24・25・26】キルヒャー『中国図説』挿絵　1667年　ニューヨーク公立図書館蔵

【図27】「万物の創造主の像」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

『日本誌』には、このほかにも明らかにヴィシュヌ神の化身（アヴァターラ）の図像に由来する偶像が登場する[51)]。フリシウスらが京都で訪れた寺院で目にしたという、「万物の創造主」の像がそれである【口絵２】【図27】。本図は、「乳海攪拌」と呼ばれる有名な神話の場面とともに表される、第二の化身クールマ（亀）の図像に着想を得ている【図26】。「乳海攪拌」とは、亀に変身したヴィシュヌが支えるマンダラ山に蛇を巻きつけ、両側から引っ張って回転させ攪拌棒の要領で大海をかき回したところ、太陽や月をはじめとする様々なものがそこから生じたという創世神話の一種である。モンタヌスは、多くの紙幅を割いてこの寺院と偶像の描写を行っている。やや長くなるが、その一部を引用する。

この像はまったく驚くべきやり方で表されている。寺院の中央に、水で満たされた大きな窪みがあり、地上７フィートの壁がこれをぐるりと囲っている。その中心には、非常に巨大な亀がおり、その甲羅および頭と足とを水面からのぞかせている。この亀の背中から太い木の幹が生え出ており、頂上に恐ろしい像が鎮座している。像の下からは、幹の周囲に向けて、先の丸くなった12のクッションが飛び出している。この像は、日本風に足を身体の下に収め、頭に黄金の冠を戴いている。頭部自体は、はだけた胸ともども真っ黒で、髪はムーア人のように縮れている。他方、冠は頂点に向けて次第に細くなっており、真珠を散りばめた鋸歯状の薔薇の花から、鋭い突起が上に突き出している。白い目が黒い肌に映えて、ギラリと光っている。首には真珠の首飾りを二重に巻き、高価なダイヤモンドの飾りをこれに結んでいる。衣服は前で大きく開き、胸から腰にかけ大部分が露出している。腹部は腰の帯で締めた布で覆われている。胸の上にも美しい真珠の紐が垂れている。［…］この像は四つの腕を持つ。左腕は斜め上に挙げ、最も伸ばした指の周りに大きな黄金の輪を示している。この腕の肘から、第二の腕が出ている。その手は閉じた蓮を手にしている。右肩のすぐ下方に、いま一つ腕がある。その手は細長い壺を持ち、絶えずそこから水が流れている。もう一つの右腕は笏を持っている。この神は全身が真っ黒であるが、この色は日本人にとって歓喜を意味している。

彼［神］が座っている木は、鋳金製である。僧侶が言うには、かつてその中には、万物の種となる根源的物質が収められていて、神はそこからあらゆる事物を創造したのだという。木の幹半ばにはとてつもなく巨大な蛇が二重に巻き付いている。木の上に座す神の右手側では、二匹の悪魔が蛇の頭および身体を、左手側では、残りの尾に至るまでの部分を二人の王と日本の賢者がつかんでいる。［…］[52]

〈筆者訳〉

モンタヌスのきわめて詳細な描写は、彼がなんらかの画像を手元で参照しつつ描写を行っていたことを示唆している。ただし、彼や画家は『中国図説』のほかにも資料を有していた可能性が高い。というのも、同書におけるヴィシュヌの各化身の説明は、挿絵と同様きわめて簡素で情報量に乏しく、実のところその情報にも根本的な誤りが多いためである。たとえばキルヒャーは、上の「乳海攪拌」の図像を別の化身であるクリシュナの物語と取り違え、彼を身籠った母親を巨人たちが大蛇の見張る牢獄に監禁した場面と説明しており、亀については一言の言及すら行っていない[53]。これに対して、「万物の創造主」としてこの像に言及するモンタヌスの記述は、意図的な脚色を加えこそすれ、明らかに原図の趣旨を理解している。

現在大英博物館が所蔵している、スローン3290番と称される写本に由来する細密画は、モンタヌスらが参照した資料の有力候補の一つとして挙げられる【口絵３】【図28 ～ 30】。この写本は、インドから伝来した細密画にオランダ語による解説を付し、ヴィシュヌの各化身の図像について詳述した書物である[54]。本稿の趣旨ではないため詳細は措くが、版元のファン・メウルスが当時この写本にアクセスすることができた可能性は高い[55]。というのも彼は、『日本誌』出版の３年後にオルフェルト・ダッペルの

【図28】魚（マツヤ）としてのヴィシュヌ　17世紀　大英博物館蔵

【図29】亀（クールマ）としてのヴィシュヌ（乳海攪拌図）17世紀　大英博物館蔵

【図30】猪（ヴァラーハ）としてのヴィシュヌ　17世紀　大英博物館蔵

筆を借りて出版した『アジア、あるいはムガール帝国およびインド地誌』（1672）において、ほかでもないこの写本を参照しながら、ヴィシュヌの十大化身について説明しているのである[56)]。

この細密画は、『中国図説』の図版のみでは説明しえない、『日本誌』の偶像の描写に関する様々な重要な細部の情報を提供してくれる。たとえば、上述の造物主の肌の黒色が強調されている点などはその一つで、これは中央上部に人型で表されたヴィシュヌの青色の肌に由来するものとみえる。特筆すべきは、モンタヌスがそれを、イエズス会宣教師ヴァリニャーノの記述に遡る、日本人にとっての喜びの色としての黒という話題に関連付けている点である[57)]。こうした連想による解釈は、大量の日本関連文献に通じた彼でこそ可能であったと言えるだろう。

17世紀は、こうした現地で描かれたインドの細密画がヨーロッパに伝わり始めた時期でもあった[58)]。『日本誌』は、『中国図説』のいささか貧弱な図版をのぞけば、ヴィシュヌの化身の図像を実質はじめて版画化した例となっている。ただし、ファン・メウルスは、正確な知識の伝達ではなく、その純粋にエキゾチックな図案に商機を見出した。彼はそれを、モンタヌスの力を借りながら日本のものとして造り替え、そのセンセーショナルな魅力が消える前に、準備中の旅行記の中にいち早く組み込んだのである。彼の同業者であり、ライバルであったヤンソニウスは、のちにフィリップ・バルダエウスの著作においてヴィシュヌの化身の図像を元の文脈に忠実に紹介するが、その出版は『日本誌』の原著出版から３年が経過したようやく1672年のことであった[59)]。なおこの年には、メウルスもまた上述のダッペルの著作において、新しくデザインした版画によってあらためて十大化身の紹介を行っている。

以上からも分かるとおり、ファン・メウルスが本書のタイトルに掲げている「日本で描かれた大量の絵による装飾付」（Verçiert met een groot getal afbeeldsels in Japan geteikent）という売り文句は、大体において偽りであった。しかしそうであるからこそ、彼はあらゆる手を尽くしてそこに信憑性を持たせようとしており、本書におけるイメージとテキストの関係をなおさら興味深いものにしていると言える。

これに関連して次に一瞥しておきたいのが、身元一切不明の使節ファン・ゼルデレンが大津の膳所（Jezi）で見物したという、パウロママ（pauromama）なる山に関する記述である【図31】[60]。モンタヌスは例によってそこでも延々と景色の描写を行っているが、注目に値するのは、次のようなエピソードでそれを締めくくっている点である。

> ゼルデレンの護衛は、城の門前につながれていた船から、実物を前に（na 't leven）パウロママのスケッチを行った。そして素描がほぼ完成に至ったところ、ちょうどゼルデレンを膳所からパウロママまで案内したBasuro Micon殿が門から出てきて、描かれたパウロママを長々と味わったのであった[61]。
>
> <筆者訳>

ファン・ゼルデレンが架空の人物であることが疑われることを考え合わせると、このエピソードの挿入はいっそう興味深い[62]。それは明らかに、直前に挟み込まれた「パウロママ」の版画が、引用文中にあるゼルデレンの匿名の護衛のスケッチに基づくというメッセージを送っている。それは実物に即して（na 't leven）描かれ、しかも普段からその景色を眺めている日本人を唸らせるほどの出来栄えであった。ゆえにそれは、この挿絵が真正なものであることを保証するのである。

【図31】「喜びの山 パウロママ」『日本誌』挿絵 館蔵オランダ語版より

ここで言われている "na 't leven" ないし "naer het leven" とは、英語では "from the life" などと訳され、日本語の「写生」にあたる概念である[63]。メウルスは、1672年に出版したモンタヌスの『アメリカ誌』にせよ、1686年のダッペルの『アフリカ誌』にせよ、異国案内記を出版するにあたって、常にそれを看板に掲げている[64]。

ファン・ゼルデレンの旅行記に先立つ商館長インダイクの江戸参府記に挿入された、シウルプラマSjurpuramaなる活火山を描いた図にもまた、この"naer het leven"へのメウルスの執着を考えるうえで興味深い箇所が見られる【図32】。本作は、17世紀までに制作された火山図の中でも出色の出来と言えるが、現実のどの山を描いたものかは未だはっきりとしない[65]。実際には、ヴェスヴィオ山やエトナ山などの火山を描いた風景画を参照しつつ制作されたものとみえる。注目に値するのは、それが前景にスケッチに没頭する画家（Tykenaar）と日本人通訳者（Japansche tolck）の姿を伴い、丁寧にも彼らのアイデンティティを逐一キャプションで説明している点である【図33】。彼らは、イメージが実物を前に描かれたものであるということ、そして写生が行われた場所が他ならぬ日本であることを示すための記号であり、燃えさかる山や硫黄流と同じくらい重要な要素だったのである。

【図32】「シウルプラマ火山」『日本誌』挿絵
館蔵オランダ語版より

【図33】図32部分

こうした版画はどのような体制で制作されていたのだろうか。本書の挿絵はしばしばモンタヌスの妄想の産物であるかのように語られがちであるが、実際には、ファン・メウルスが主導権を握っていたはずである。特にメウルスは、口絵や表題紙に印刷された商号に「彫版師にして書籍商」（Plaat-snyder en Boekverkooper）とあるとおり、自ら銅版画制作の経験と知識を有していた[66]。図版の内容や挿入位置はもちろん、その質に至るまで、彼の監督が隅々まで行き届いていたに違いない。書籍商として多忙をきわめていた彼が実際にどこまで現場に立つことができたかは不明であるが、彼が実際にビュラン（彫刻刀）を手に制作していた可能性もある。

とはいえ、下絵の提供者をはじめ、彼のほかにも複数の芸術家・職人が関係していたことは間違いない。もっとも、本書の版画に制作者の署名などは一切残されていないため、具体的な名前を挙げることは難しい。署名の不在は、目撃者以外の仲介者の存在が意識されればされるほど、必然的に「あるがまま」のイメージという虚構が崩れ去るという配慮かもしれない。契約書の類も見つかっておらず、制作体制の究明はなおも重要な課題となっている。

しかし近年、オランダのレイデン大学の図書館に、先述した方広寺大仏殿の版画の下絵と見られる素描が所蔵されていることが明らかとなった【図34】[67]。本作は、様式的な見地から、17世紀後半のオランダで最も成功した版画家の一人、ロメイン・デ・ホーヘ（1645～1708）の手に帰されている。デ・ホーヘは非常に多産な作家で、アムステルダム内外の出版界で大変重宝されたことが知られ、旅行記の挿絵も多数手掛けてもいる[68]。また、本稿ではさらに、2022年5月にパリで行われたオー

【図34】「大仏殿に入るオランダ使節団」
ロメイン・デ・ホーヘ／画
17世紀　レイデン大学図書館蔵

クションに出品された、やはりデ・ホーヘに帰属されている素描の存在に注意を促しておきたい[69]。同オークションのエントリは、本作を《中国の海岸沿いに到着した使節団》とし、未知の書物の図版のための下絵としている。しかし本作の画面や寸法は、上で触れた、宮宿でのファン・ゼルデレンの歓待の図の下絵と見て間違いないものとなっている。

おわりに

『日本誌』は、いわゆる科学革命を経て啓蒙の世紀を迎えようとする時代の書物でありながら、古くはマルコ・ポーロの『東方見聞録』にまで遡る、驚異譚の集成としての東方旅行記の伝統の延長に位置している。しかしその伝統が、アムステルダムのファン・メウルスという抜け目のない出版人のもと、博識のモンタヌスの筆を介し、銅版画という新しい視覚メディアと出会ったことで、本書は西洋で出版された日本関連書物の中でもきわめて特異な地位を占めることとなった。

本稿では、江戸博所蔵本をもとに、『日本誌』のイメージとテクストの関係について複数の観点から分析を行った。そこには、「本文」と「挿絵」という言葉が暗黙裡に前提としている主従関係とは異質の、複雑な関係性をみてとることができた。特に江戸博所蔵本は、新版であるがゆえに含まれる様々な変更点を通じて、当時のヨーロッパの出版界の動向や、それを左右するより大きな政治・経済・文化的状況の変化を物語る恰好の歴史的資料となっている。

本書に関してさらに追及されるべき課題は山積している。たとえば、日本への舶載の問題はその一つであろう。ニューホフの『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』(1655)や『東西使節紀行』(1682)は、先取的な蘭学者や洋画家たちにより盛んに研究されることとなったが、同じくファン・メウルスの出版となる本書が日本に届くことはなかったのだろうか[70]。もし届くことがあったとしたら、江戸時代の知識人たちは本書の奇抜な図版にどのような反応を示したのだろうか。現在判明している限りでは、蕃書調所の蔵書目録の中に、オランダ語再版本とフランス語版の題名が確認できる[71]。それ以外に何らかの批評の言葉を残した人物がいたとすれば、それは大変興味深いものであるに違いない。

【註】

1）Arnordus Montanus, *Ambassades de la Compagnie Hollandoise des Indes d'Orient, vers l'Enpereur du Japon* [...] (Leiden: Henry Drummond, 1686), fols. 3r-3v. "La connaissance du monde et de ses habitans, est la plus belle et la plus agreable de toutes les Sciences. C'est elle qui divertit l'Esprit, qui satisfait la curiosité, et qui instruit l'homme, en luy faisant connoistre le genie, les mœurs, les coustumes et la Religion des différens peuples de l'univers. Aussi est-elle la seule qui soit bien venue dans les Compagnies, et qui puisse librement entrer dans toutes les conversations, sans crainte d'estre accusée de Pedenterie. C'est la recherche de cette belle Science qui a excitté la curiosité de tant de personnes, et qui les a posrtées dans les Païs les plus éloignés, pour voir & observer les mœurs et les coustumcs de ceux qui les habitent et puis qu'ils ont bien vouleu faire part au public de leurs relations, nous serions bien peu curieux, si nous negligions un moyen si facile qu'ils nous donnent, d'apprendre en peu de tems, et sans sortir de chez nous, à connaitre les peuples les plus reculés de nos Climats."

2）Arnordus Montanus, *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische Maatschappy in 't Vereenigde Nederland, aan de*

Kaisaren van Japan [...] (Amsterdam: Jacob Meurs, 1669).

３）フレデリック・クレインス『十七世紀のオランダ人が見た日本』（臨川書店、2010年）、150頁。

４）Isabella H. Van Eeghen, *De AmsterdamseBoekhandel 1680–1725*, Vol. II (Amsterdam: Scheltema & Holkema N.V., 1963), 211–12.

５）モンタヌスの人と生涯については、レイニア・ヘッセリンク「カルヴァン主義思想家、アルノルドゥス・モンターヌスとその業績」有坂隆道編『日本洋学史の研究X』（創元社、1991年）、１～23頁。

６）Benjamin Schmidt, *Inventing Exoticism: Geography, Globalism, and Europe's Early Modern World* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2015), 83–161.

７）和田萬吉『モンタヌス日本誌』（丙午出版社、1925年）。

８）島田孝右編『モンタヌス「日本誌」英語版〈日本語版復刻〉』（柏書房、2004年）および同編『モンタヌス「日本誌」英語版 別冊解題・索引』（柏書房、2004年）。

９）永積洋子訳『南部漂着記 ―南部山田浦漂着のオランダ船長コルネリス・スハープの日記』（キリシタン文化研究会、1974年）、131～99頁。

10）ヘスリンク前掲書（註５）、クレインス前掲書（註３）149～90頁。

11）Arnoldus Montanus, *Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in 't Vereenigde Nederland, aen de Kaisaren van Japan* [...] (Amsterdam: Jacob Meurs, 1669).

12）Isabella H. Van Eeghen, "Arnoldus Montanus's book on Japan," *Quaerendo*, vol. 2, no. 4 (1977), 250–72.

13）島田前掲『別冊解題』（註８）26頁では、「英語版とオランダ語版とでは、図版の向きが左右逆になっているものがある」とされるが、おそらくここで参照されているオランダ語版は再版本である。

14）Arnoldus Montanus, *Ambassades mémorables de la compagnie des Indes Orientales des Provinces Unies, vers les empereurs du Japon* [...] (Amsterdam: Jacob de Meurs, 1680).

15）この比較的珍しいモノグラムは、たとえば1669年に発行された、東インド会社総督スペールマンによるマカッサル侵攻の勝利を記念する版画にもみられる。次を参照。Gerrit van Rijn and C. van Ommeren, *Atlas van Stolk: Katalogus der historie-, spot- en zinneprenten betrekkelijk de geschiedenis van Nederland*, vol. 3 (Amsterdam: Frederik Muller & Co., 1897), 55–56. デ･フリースの『東西インド奇事詳解』（1682）の口絵にも、同じモノグラムが見いだせる（第１・３分冊）。Cf. Simon de Vries, *Curieuse aenmerckingen der bysonderste Oost en West-Indische dingen* [...] , 4 vols. (Utrecht: Johannes Ribbius, 1682).

16）フルール・ド・リスの紋章については、ミシェル・パストゥロー著／篠田勝英訳『ヨーロッパ中世象徴史』（白水社、2008年）、98～110頁。

17）フランス語版は、パリの書肆アントワーヌ・セリエのもとで購入することができた。ファン・エーヘンは、フランス語版の出版プロジェクトの始動時期を、1678年から79年にかけての講和締結以降とみる。Van Eeghen, "Montanus's book," 265–67.

18）Van Eeghen, "Montanus's book," 269.

19）17世紀オランダにおける独占印刷権（privilege）の実情については、たとえば次を参照。Marius Buning, "Privileging the Common Good: the Moral Economy of Printing Privileges in the Seventeenth-Century Dutch Republic," in *Buying and Selling: The Business of Books in Early Modern Europe*, ed. Shanti Grahelli (Leiden: Brill, 2019), 88–108.

20）和田前掲書（註７）、３頁。

21）概要については、島田前掲『別冊解題』（註８）７～８頁およびクレインス前掲書（註３）149～58頁を参照。さらに詳しくは、Donald F. Lach and Edwin J. van Kley, *Asia in the Making of Europe, Volume III: A Century of Advance. Book 4: East Asia* (Chicago: The University of Chicago Press, 1993), 1873–82; Peter Rietbergen, *Japan verwoord. Nihon door Nederlandse ogen 1600–1799* (Amsterdam: Hotei Publishing, 2003), 197–213.

22）ブレスケンス号事件については、たとえば次を参照。レイニアー・H・ヘスリンク著／鈴木邦子訳『オランダ人捕縛から探る近世史』（山田町教育委員会、1998年）。

23）Reinier H. Hesselink, "Memorable Embassies: The Secret History of Arnoldus Montanus' Atlas Japannensis," *Quaerendo*, vol. 32, no. 1–2 (2002), 104–12.

24）Montanus, *Ambassades mémorables*, seconde partie, 1. "Il n'est point de curieux qui n'en doive étre satisfait, & même

qui ne puisse croire que la matière est épuisée. Cependant la passion que j'ay de ne rien donner au public qui ne soit achevé, m'a fait chercher si elle l'etoit en effet, & j'ay trouve sur le même sujet outre les relations susdites des choses si curieuses & en si grande quantité, que je croirois cette Histoire imparfaite si ce qui fuit n'y étoit joint."

25）英語版・フランス版にはそれぞれ１、２点の省略と追加が見られ、総数が異なる。詳しくは、島田『別冊解題』（註８）24 ～ 26頁に掲載の比較表を参照のこと。

26）本書の版画に刻印された特権の表示については、Van Eeghen, "Montanus's book," 259 and 266.

27）クレインス前掲書（註３）、156頁。

28）大沼由布「ヨーロッパ中世の東方旅行記と脅威」山中由利子編『〈脅威〉の文化史』（名古屋大学出版会、2015年）、95 ～ 112頁。

29）永積前掲書（註９）、77 ～ 78頁。

30）Montanus, *Gesantschappen*, 340–41. "Terwyl over dusdanig bescheid niet weinig bedremmelt zaten, wierden Schaap en Byleveld door de huiswaerd in een kostelyk vertrek afgeroepen: vonden aldaar de tolken Kytsbyoye en Phatsyosaymon, nevens een Japans edelman, voorzien van een groot papier vol Japans schrift, en een vierkant verlakt kasje. De edelman zat niet zonder hoovaerdige statigheit op een kostelyk tapyt in een geborduurde rok met peltery gevoerdt bloodts hooft. Het hair was voor, achter en nevens de ooren toegestrikt. De rok gaapte voor de borst, als dat omtrent het hart toe-gehaakt hing met een goude gesp. Tusschen de rok stak gebloemd onderkleed uit : de ruime broek schoot verre over de knien heen. De slinker-hand hield een waaijer, welker top pronkte met een vergulde roos. Weder-zyds schikten de lyf-knechten het tapyt, ten einde de franje over een vierkante zetel gelijkelijk afhing. In zulke gestalte vind men doorgaans de edel-luiden onder haar afdakken zitten, werwaards op tapyten door haar huizen ggedraagen worden. Andersints als over straat te doen hebben, gebruiken den dienst der palankyns." 訳出にあたり、永積前掲書（註９）、182頁を参照した。

31）永積前掲書（註９）、78頁。

32）永積前掲書（註９）、184頁。

33）17世紀のオランダにおける漢字に対する関心については、深谷訓子「書画同源？オランダと漢字の出会い」幸福輝編『17世紀オランダ美術と〈アジア〉』（中央公論美術出版、2018年）、275 ～ 300頁。

34）永積前掲書（註９）、184頁。

35）Montanus, *Gesantschappen*, 448. "Hy loste vast uit de bark de geschenken voor den Kaisar op strandt, wanneer Mias stadthouder niet zonder staetelyk gevolg ter poort uit reed, om Zelderen te verwellekomen. Even buiten de poort hingen aan wippen kopere bommen, op welke de Japanders groot geluid maakten. Voorts reden verscheide norimons na strand, vergezelschapt by merkelyk aantal lyfnechten. Aan de voet van een hooge rotze stonden vier Hollandtsche trompetters, die lustig op bliesen. De stadthouder Obirham Giantondono genaamt, kreegh zoo haast Zelderen in 't gezicht niet, of hy stapte uit zyn norimon: liep den gesant tegemoet: en boog zich, na de Japansche wyse, ter aerde. Achter hem stonden etteluke lyfschutten, van welke sommige roers, andere lange pieken, andere nangenetten droegen."

36）Jean Frédéric Bernard ed., *Cérémonies et coutumes religieuses des peuples idolâtres* [...] (Amsterdam: Jean Frédéric Bernard, 1728), t. 1, 295–348.

37）Montanus, *Gesantschappen*, 248–49. クレインス前掲書（註３）、181頁の翻訳も参照。

38）Rietbergen, *Japan Verwood*, 211–13.

39）岡田章雄「モンタヌス日本誌の大佛の圖に觸れて」『美術史學』第73号（1943）、36 ～ 41頁。

40）大坂城図については、有坂隆道「オランダ三話」『日本洋学史の研究 IV』（創元社、1977年）、231頁。

41）Rietbergen, *Japan Verwood*, 211. クレインス前掲書（註３）、156–58頁。

42）Hesselink, "Memorable Embassies," 111–12.

43）Montanus, *Gesantschappen*, 69–70. "Binnen bidden de Japanders een ysselyk beeld aan: welk een kostelyke gouden kroon, vol edele gesteenten, op den kop heeft. De kop zelf gelykt na een wildt swyns-hoofdt, met uitstekende slagtanden. Overde borst hangt een sluijer van malkander afgeslagen. Vier armen en handen maken het beeld te afschuwelyker. De eene slinker-hand steekt opwaarts, en vertoont een ring om het uiterste van de langste vinger:

d'andere hangt neder, en houdt een bloem, niet ongelyk een opene lelie. De bovenste rechter-hand bevat een kleine draaks-kop, die vuur spouwt: de benedenste een goude ryks-staf: met de voeten staat hy op de borst en dik des beens van een andere leggende duivel. Deeze heft een schrikkelyk ruig hoofd, vervaerlyk door lange osse-hoornen. Om den hals leit een swachtel, om den middel gegespt met een gordel vol groote knoopen. Een lange staert hangt tusschen de beenen onder uit. Breede kousse-banden steeken ter zyden beneden de knien wyd uit. De rechter arm leit vlak uit gestrekr; den slinker is geboogen in de zyde. Deeze duivelen draagen den naam Joosje Tidebayk; maar God Joosje Goesar."

44）クレインス前掲書（註３）、163 ～ 64頁。

45）Montanus, *Gesantschappen*, 73.

46）魚籃観音の図像については、国訳秘密儀軌編纂局編『仏像図鑑』（国書刊行会、1991年）、598頁。

47）Lach and Van Kley, *Asia in the Making*, 1875, n. 197. Eva Zhang, "Kannon–Guanyin–Virgin Mary: Early Modern Discourses on Alterity, Religion and Images," in *Trans Cultural Turbulences: Towards a Multi-Sited Reading of Image Flows*, eds. C. Brosius and R. Wenzlhuemer (Berlin: Springer Verlag, 2011), 171–89.

48）ヴィシュヌ神の化身については、立川武蔵『ヒンドゥー神話の神々』（せりか書房、2008年）、95 ～ 168頁。

49）Athanasius Kircher, *Athanasii Kircheri e Soc. Jesu monumentatis* (Amsterdam: Apud Joannem Janssonium a Waesberge, & ELizeum Weyerstraet, 1667). キルヒャーについては、たとえば次を参照。ジョスリン・ゴドウィン著／川島昭夫訳『キルヒャーの世界図鑑―よみがえる普遍の夢』（工作舎、1986年）。

50）Athanasius Kircher, *Athanasii Kircheri China illustrata* (Amsterdam: Jacobum à Meurs, 1667). 次も参照。Athanasius Kircher, trans. Charles van Tuyl, *China Illustrata* (Bloomington: Indiana University Research Institute for Inner Asian Studies, 1987), 147–52.

51）次も参照。宮田珠己『おかしなジパング図版帖』（パイ インターナショナル、2013年）、142 ～ 59頁。

52）Montanus, *Gesantschappen*, 252–53. "Op een gantsch wonderlyke wyze wordt deeze afgebeeldt. Midden weegh des tempels is een groote kuil vol water, in de rondte met een muur opgemetselt, zeven voeten boven de gemeine grondt. In het midden staat een yselyk groote schildt-padde, die schildt, hoofdt en pooten uit het water heft. Uit de tugge der schildt-padde groeid de stamme van een dike boom, op wiens top een vervaerlyk beeld zit. Onder ' t lyf steken twaalf kussens, aan de uiterste einden rond, verre over den boom rondtom uit. Het beeld, geplaatst na de Japansche manier, met de voeten onder het lyf, draagt een goude kroon op 't hoofd. Het hoofd zelf, gelyk ook d' open borst, is pik-zwart: 't hair wollig niet ongelyk der Mooren. Maar de kroon loopt boven spits toe, en steelt een scherpe pinne opwaards uit een gekartelde roos vol peerlen. Het wit der oogen blinkt by de zwarte huid vervaerlyk af. Om den hals hangt een dubbelde peerel-snoer, en aan de zelve een kostelyk diamanten boot. De rok gaapt wydt van malkander: zulks de borst meest bloot staar tot de buik toe. De buik word bedekt van een kleedt, dat met een gordel boven de heupen toegestrikt is. Langs de borst slingert een snoer vol uitmuntende peerlen: en onder de slinker armen steekt een fluijer styf van goudt, in bogten gekronkelt [...] 't Beeldt heft vier armen: d'eene luster arm steekt schuin opwaarts, en om de voorste vinger een groote goude hoepel: uit d'elleboog van deeze arm vertoond zich een tweede: de handt, toegenepen, houd een lelie vast. Weinig beneden de rechter schouder ryst een rechter arm, wiens handt een langwerpige kruik bevat, waaruit geduurig water gespuit word: d'andere rechter hand houd een scepter. De afgodt is geheel zwart, welke verwe by de Japanders blydtschap beteikent. / De boom, waar op hy zit, is van gegooten metaal: en binnen dezelve lagen beslooten d'eerste stoffen en zaden aller dingen, waaruit deeze afgodt alles toegestelt heeft, volgens de beuzelingen der Bonsii. Om 't midden van de boom is een ongemein groote slange twee maal om geslangen, welkers kop en verdere lyf by twee duivelster rechter zyde des afgodts, zittende op den boom, vast gehouden wordt: het overrige lichaam tot de staert toe grypen twee koningen en een Japansche wyze ter slinker hand aan. "

53）Kircher, trans. Tuyl, *China Illustrata*, 150.

54）この写本については、次を参照のこと。Robert J. Del Bontà, "Engraving India in 17th- and 18th-century Europe," *Art in Print*, vol. 4, no. 4 (2014), 20–25.

55）Cf. Carolien Stolte, *Dutch Sources on South Asia, c. 1600–1825*, vol. 5 (New Delhi: Manohar Publishers, 2012).

56）Jarl Charpentier, “The Brit. Mus. Ms. Sloane 3290, the common source of Baldaeus and Dapper,” *Bulltin of the School of Bulletin of the School of Oriental Studies, University of London*, vol. 3, no. 3 (1924), 413–20.

57）ヴァリニャーノ著／松田毅一ほか訳『日本巡察記』（平凡社、1990年）、20頁。日本人にとっての歓喜の色としての黒への言及は、マッフェイ『東インド史』（1589）にもみられる。Cf. Giovanni Pietro Maffei, *Le Historie delle Indie Orientali* (Fiorenza: Filippino Giunti, 1589), 485.

58）Robert J. Del Bontà, “Early European Engravings on Indian Themes,” in *CSMVS Research Journal* (2016), ed. Saryu Doshi (Bombay: Chhatrapati Shivaji Maharaj Vastu Sangrahalaya), 72–83.

59）Philippus Baldaeus, *Naauwkeurige beschryvinge van Malabar en Choromandel, der zelver aangrenzende ryken, en het machtige eyland Ceylon* [...] (Amsterdam: Johannes Janssonius van Waasberge en Johannes van Someren, 1672).

60）Montanus, *Gesantschappen*, 445–46.

61）Ibid., 446. “Zelderens opwachter teikende Pauromama, uit de roei-bark, vast gemaakt voor de poort des slot-voogds, na ’t leven af. Hy had nu de teikening genoegzaam voltooit, wanneer de heer Basuro Micondono, die Zelderen van Jezi tot Pauromama geleide, ter poort uit stapte, en langen tydt vermaak schepte in ’t afgebeelde Pauromama.”

62）次も参照のこと。中島大輔「A. モンタヌスの『日本誌』に描かれたCangoxuma（鹿児島）：その史料的価値に関する一考察」『経済学論集』第87号（2016）、41 ～ 79頁。

63）“Naer het leven”の論理とその歴史については、Claudia Swan, “*Ad vivum, naer het leven*, from the life: defining a mode of representation,” *Word and Image*, vol. 11, no. 4 (1995), 353–72. さらに深谷訓子「17世紀オランダにおける素描教育―工房の外へ:『線描帖（Tekenboek）』と裸体素描」『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号（2010）、41~55頁。

64）Schmidt, *Inventing Exoticism*, 83–161.

65）Montanus, *Gesantschappen*, 307, 354, 416, and 418. 最近クレインス氏はこれを富士山と比定している。フレデリック・クレインス「〈口絵〉モンターヌスのもう一つの富士山図」『日文研』第63号（2019）口絵解説を参照のこと。

66）メウルスについては、次も参照。John E. Wills, “Author, Publisher, Patron, World: A Case Study of Old Books and Global Consciousness,” *Journal of Early Modern History* 13 (2009), 375–433.

67）Antoon Ott, “Romeyn de Hooghe as a designer of prints for the publisher Jacob van Meurs,” *Delineavit et sculpsit*, 34 (2010), 20–27.

68）デ・ホーヘについては、たとえば次を参照。Henk van Nierop, *The Life of Romeyn de Hooghe 1645–1708: Prints, Pamphlets, and Politics in the Dutch Golden Age* (Amsterdam: Amsterdam University Press, 2019).

69）Christie’s, Paris, Live Auction 21059, 18 May 2022, lot 33.

70）勝盛森子「ニューホフ「東西海陸紀行」」青木歳幸ほか編『洋学史研究事典』（思文閣出版、2021年）、132頁。

71）蘭学資料研究会編『江戸幕府旧蔵洋書目録』（蘭学資料研究会、1957年）49 ～ 50頁。次も参照。Van Eeghen, “Montanus’s Book,” 271.